

# 「交通安全意識の向上を目指して」 ～身の回りの課題を見つけ、自ら解決できる生徒の育成～

令和4年度 高知県学校安全総合支援事業（交通安全）

高知県教育委員会 拠点校 高知県立須崎総合高等学校

## 拠点校の取組

### （1）拠点校の目標

本校の通学路は主に車の行き違いが困難な住宅街の狭い道路を利用している。列車通学生は最寄りの JR 大間駅を利用し、県道 388 号を渡り住宅街へ進入する。自転車及び原付バイク通学生は県道 388 号及び県道に沿った沿線道路を利用し、住宅街へ進入する。最終的に学校へ登校する 1 本の坂道に集中し、その坂道も狭く、蛇行している。

開校以前から通学路の問題は継続課題で、特に朝の通学時間帯は地域の方々の通勤時間帯と合わせて、保育園・小・中学校の児童生徒の登園、登校時間と重なるため混雑する。このため、通学路を利用するにあたり、歩行者、自転車、原付バイク等の通学マナーの意識向上や交通ルールを守る意識を持ち、交通事故を防ぐことが大きな課題となる。

一方、万が一事故にあった場合、自分の命を守るためにも、自転車通学生のヘルメット着用が大きな課題となっている。本校では、PTAの支援を得て、ヘルメット購入金額を助成(2,000円)することで、県の助成と併せて個人負担がないようにしている。昨年度、ヘルメット着用推進週間において、期間中はヘルメット着用率が上昇するも、取組が終了すると元に戻るという状況であった。本年度4月にヘルメット着用率の調査を行い、1年生50%、2年生16%、3年生5%であった。

これらの点を踏まえて、安全教育推進事業（交通安全）取組組織の構築や交通安全教育の必要性を認識し、自ら考えて行動する意識の向上及び判断力を養うことを目指す。また、拠点校の取組を地域全体で共有する事業を実施していくなかで、生徒が交通安全に対して主体的に取り組む態度の育成を目標とする。さらに、そういった態度を育成するなかで、自分の命を守るために、自分から進んでヘルメットを着用する生徒を増やし、着用率が常時50%以上となることを目標として掲げる。

### （2）安全教育の充実に関する取組

#### ① 高知県高校生ヘルメット着用推進シンポジウム（令和4年8月17日）

県内11校の代表生徒に集ってもらい、各校の現状を踏まえて課題を共有し、連帯意識を持って取組が進められるようにシンポジウムを開催した。シンポジウムでは、高知追手前高校保護者である塩見絵里香氏に基調講演をして頂くとともに、東北工業大学の小川教授を外部有識者として招き、グループディスカッションでの指導助言等、専門的知見の活用を図った。

当初は参加校11校に本校に集まってもらう予定だったが、新型コロナウイルスの感染防止対策のため、オンラインでの開催となった。また、観覧者も、中学生や地域の方等、多数を招待することができなかったが、須崎市内の中学校の先生方や須崎市の交通安全にかかわる方々をオブザーバーとして招待でき、充実したシンポジウムとなった。

基調講演では、「ヘルメットを着用することは、自分の命を守るだけでなく、家族の笑顔を守ることでもある」という言葉が参加生徒の心に残ったようでした。

参加した高校生は、「なぜ、被らないのか」「楽しくヘルメットを被る方法」「学校ごとに広めるための具体的な方策」について意見を出し合った。

小川教授からは、「今回の高校生の活発な意見交換した活力が世間を動かすことになる」「ヘルメットは暑い」という固定概念があるが、実は暑くなくかつ重たくないというお言葉をいただき、見た目と実際に差異があることを知ることができた。



写真1 高知県高校生ヘルメット着用推進シンポジウムの様子

② 須崎市公立中高校生合同自転車ヘルメット着用啓発活動（令和4年11月14日）

すさきすきキャラ「しんじょう君」にも協力を依頼し、ヘルメットの着用を訴えながら、ノベルティグッズの木製コースター、クリアファイル、ポチ袋を配布した。

配布グッズは本校の美術部、工業科の住環境専攻、家庭科選択生徒等、多くの生徒たちが協力して製作したもので、関わった生徒たちの達成感や自己有用感が高まった。

また、今回の啓発活動には、本校の生徒だけでなく、須崎警察署、学校安全対策課にも協力を要請し、中学校・警察・行政が連携して協力するモデルとなった。参加した中学生から、グッズを配布する際、一緒に活動した高校生が頼もしく見え、模範を示してくれたので、「勇気をもって声をかけることができた」という声もあった。



写真2 須崎市中高校生合同自転車ヘルメット着用啓発活動の様子と配布したノベルティグッズ

③ 初心者原付バイク安全講習会（令和4年4月13日）

新しく免許取得した2年生を対象に実施した。発車・停車の仕方、右左折、車線変更等についての講習会を実施し、技能を高めた。



写真3 初心者原付バイク安全講習会

#### ④ 原付バイク安全講習会・自転車安全講習会の実施（令和4年4月28日）

本校は、通学が不便な地域の生徒に対して条件を定め、原付バイクによる通学を特別に許可している。原付バイクによる事故を未然に防ぐため、原付バイク安全講習会を実施し、原付バイク通学生以外は、同日の同時時間帯に、自転車ヘルメットの着用指導を中心に自転車安全講習会を実施した。



写真3 原付バイク安全講習会



自転車安全講習会

#### ⑤ 自転車ヘルメット着用合同啓発活動（令和4年12月14日）

高知市はりまや橋付近で行われた自転車ヘルメット着用に係る合同啓発活動に参加した。交通安全課や高知県警察本部や高知警察署と連携し、参加者自ら自転車ヘルメットを被り、チラシを配布しながら下校する中高生に対してヘルメット着用を呼びかけた。

#### ⑥ 交通安全新聞の発行

交通安全推進委員による交通安全新聞を発行し、生徒便で各家庭に配布した。

今年度は、自転車ヘルメットの着用問題だけでなく、講習会等を含めた交通安全全般を記事にして生徒が少しでも意識が高まるような紙面にした。具体的には、講習会や自転車点検の様子や本校で開催されたシンポジウムなどについての紹介を行った。

本校が高知県の先進校であるという意識付け及びヘルメット着用に関する本校の課題を共有し、交通安全に対して主体的に取り組む態度の醸成を図った。



写真5 交通安全新聞

### (3) 安全管理の充実に関する取組

#### ① 自転車ヘルメット着用推進週間の実施

今年度、ヘルメット着用推進週間を5回実施した。次項は、ヘルメット着用人数と着用率の推移である。5月・6月ともに、概ね着用率は20%前半であり、昨年度よりも着用率が増加した。ヘルメット着用については、罰則がなく、新たに着用者を増やすのが難しい状況であるが、昨年度、啓発を継続すると増加する傾向がみられたので、10月と11月にも「ヘルメット着用週間」を行った。その結果、10月・11月ともに着用率が、日を追うごとに増加するようになり、20%超えが回復された。1月も同様な傾向がみられ、継続することで着用率が向上するという結果になった。

5回の調査とともに、昨年度よりも着用率が増加したが、着用率50%という目標を大きく下回った。ヘルメット着用に向けて、生徒の意識を変えていくことは簡単ではないが、ヘルメット着用週間を通じて、何人かの生徒が自らの意志でヘルメットを着用するようになった。継続して取り組むことが大切であることが改めて確認できた。

表1 ヘルメット着用推進週間の着用率

実施日	5月（昨年度 12%）				6月（昨年度 17%）			
	23（月）	24（火）	25（水）	27（金）	20（月）	22（水）	24（金）	27（月）
着用数／台数	19/83	18/84	21/92	16/81	16/76	20/89	22/93	21/95
着用率	23	21	23	20	21	23	24	22

実施日	10月（昨年度 15%）				11月（昨年度 18%）				
	3（月）	4（火）	5（水）	6（木）	7（金）	8（火）	9（水）	10（木）	11（金）
着用数／台数	13/86	17/82	22/90	18/66	13/79	16/76	20/79	19/82	21/90
着用率	15	21	24	27	17	21	25	23	23

実施日	1月（昨年度 19%）		
	11（水）	12（木）	13（金）
着用数／台数	13/67	16/67	15/54
着用率	19	24	28

（4）成果と課題

本年度も、昨年度に引き続き県内の高校生がヘルメット着用について、課題を共有し連帯意識を持って取組を進めることができた。

昨年度を上回る県内11校の代表生徒が参加し、オンラインにて「高知県高校生ヘルメット着用推進シンポジウム」を開催し、県内の高校生が議論し、いろいろな発想やアイデアが発表され、今後の高校生の主体的な活動に繋げることができた。さらに11月には「須崎市中高校生合同自転車ヘルメット着用啓発活動」を行い、高校生だけでなく、警察、行政も一緒になって活動するなど、交通安全推進の拠点校としての役割を果たした。

校内の取組では、図1のように、アンケートで83%の生徒が、交通安全に関する意識やマナーが向上したと答えている。目標の80%を昨年度に続いて上回った。継続的に取り組むことで、意識の変容が見られた。

課題は、自転車ヘルメット着用率の向上である。特に新入生については、強制的なところはあがるが、中学校まではヘルメット着用ができていないので、高校でも継続して着用する意識をどうつくるかが課題である。

（5）今後の取組

自転車ヘルメットの着用については、これまでの取組を継続しつつ、「ヘルメットを着用して原付バイクを運転することと同じ意識で自転車に乗る時にも、ヘルメットを着用する」ということを認識させるためのアプローチを別の角度から考える必要がある。今年のシンポジウムにおける塩見氏の講演は、参加者にとって非常にインパクトがあった。「命」や「笑顔」をキーワードにした講演や異年齢での共同啓発活動等を通して、着用を強制するのではなく、自転車に乗る生徒はヘルメットを持っているという文化をつくることから始め、県内の高校生の自転車ヘルメット着用に対する意識を高めたい。また、シンポジウムで参加生徒から提案されたヘルメットの通気性などの機能性やデザイン性などを立案していくことも重要であると思われる。そして、いずれは、「高知県が高校生の主体的な取組により着用率が増加した先進的な県」と言われることを長期的な目標に掲げたい。

「交通安全推進事業の取組を通して、交通安全に関する意識やマナーが向上したか。」

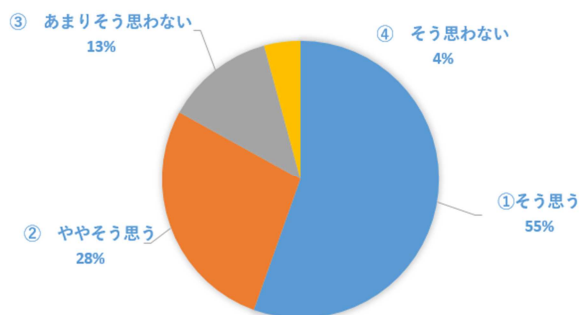


図1 交通安全推進事業に関するアンケート